

# 音楽への情熱と 愛情を込めて 弾いていきたい

ゲスト◎ピアニスト 〈フレッシュアーティスト賞〉

## 河村 尚子氏



——現在の道に進まれたきっかけから教えてください。

河村 ドイツで育ち、5歳でピアノを始めました。最初はピアノ一筋というほどではなかったのですが、12歳でバートル・シュライバー先生に師事し、「あなたは本気でプロのピアニストになる気があるのか」と聞かれて。プロがどんなに大変か知らなかったし、負けず嫌いな性格なので「あります」と答え、本格的なレッスンを始めました。

最初に教えてもらったのが、音の色。ただ譜面通りに音をつなぐのではなく、「このフレーズはどんな色にしたらいい？」と聞かれるんですね。青空のブルー、野原のグリーンというように、音を色でとらえる。それが表現豊かな演奏につながることを教えられました。

青木 私はもともとクラシック音楽の素人です。それがNHK交響楽団（N響）の理事長になれと辞令が出て、無理ですと申し上げたら、当時の会長から僕も歌謡曲しか知らないのに理事をやっているんだからと言われた（笑）。今の時代、オーケストラにも経営感覚が必要だから、その部分でお手伝いしようと考えました。

最初の仕事は、世界的な指揮者であったシャルル・デュトワ氏の招聘でした。彼は20世紀音楽への造詣が深く、指揮する曲も近現代のものが圧倒的に多い。一方、日本のクラシック音楽の源流はドイツの古典派で、しかもN響はその正統を受け継ぐオーケストラ。そこに彼を音楽監督として招くわけですから、批判もありました。でも、結果として新しいN響ファウンデーションを開拓することができたと思います。

### 感情豊かなスラブ系の音楽がルーツ

——河村さんはドイツで音楽教育を受けてこられ、



1998年ポーランド・トルンで演奏する河村氏

### やはり演奏もドイツ流といえるのでしょうか？

河村 確かにドイツで教育を受けましたが、私が師事した先生に実はドイツ人はいません。最初に教わった澤野京子先生はドイツ在住の日本人で、ロシア音楽に詳しい。シュライバー先生はポーランド人、大学で師事したクライネフ先生はロシア人です。だからドイツにいても、スラブ系の影響が強いと自分では思っています。

スラブ系の人たちは、感情表現が豊か。裏表なく、喜怒哀楽がはつきりしています。スケールが大きい。食べる量もすごいですからね（笑）。そうした開放的な民族性が演奏にも表れているように思います。

### ——プロの音楽家として、大切にしていることは何ですか？

河村 私の兄はビジネスマンで、ギターが趣味なのですが、練習はいつも帰宅後。でも、疲れているはずなのにすごく楽しそうに、生き生きと演奏しています。その姿を見ると、お客様の前で演奏するプロのピアニストとして、兄以上の情熱を持って音楽に取り組まなくてはと思います。限られた時間の中で演奏するアマチュアのように、いつもみずみずしい気持ちで音楽に接し、愛情を込めてピアノを弾いていきたいと思っています。



2007年9月 ウクライナ・キエフにて恩師クライネフ氏と

### プロフィール◎河村尚子氏（かわむら・ひさこ）

1981年、兵庫県西宮市生まれ。5歳よりドイツ在住。ハノーファー国立音楽芸術大学在学中に数々のコンクールで優勝・入賞を重ね、06年には難関のミュンヘン国際コンクール第2位。翌年、多くの名ピアニストを輩出しているクララ・ハスキル国際コンクールで優勝を飾り、世界の注目をあびる。現在はドイツを拠点に欧州各地で積極的に行リサイタルを行っているほか、一流オーケストラとの共演も多数。また、日本においても09年に紀尾井ホールで本格的なリサイタルデビュー。満席の聴衆から喝采を受け大きな話題となった。いま、最も活躍が期待される若手ピアニスト。



# 人の縁に感謝し 宮崎の音楽祭を 盛り上げていきたい

ゲスト◎宮崎県立芸術劇場理事長〈特別賞〉

## 青木 賢児氏

弦が切れたことで、つながった縁

青木さんは、1996年に創設した「宮崎国際室内音楽祭」に世界的なバイオリニストのアイザック・スターン氏を招き、今日の成功をもたらしました。

青木 93年に宮崎県立芸術劇場の理事長に就任し、ホールを盛り上げるため、音楽祭を開こうと考えました。その核になる音楽家として彼に打診したのですが、「日本には何度も行つたが、宮崎なんて知らない」と。でも、こちらも引き下らず1年間ずつと追いかけた。すると彼も面白がつて、今ここにいるぞとわざわざ電話をかけてくるんですね(笑)。そのうち信頼関係ができて、出演の了解をもらうことができました。

第一回音楽祭の最終日、最後の演奏曲は、ブラームスの弦楽六重奏曲第1番を予定していました。しかし、なぜか彼は第2番を練習してきました。原因はファックスの誤読。共演者はあわてて第2番を練習し、何とか間に合わせましたが、今度は本番の公演中にスターンの弦が切れてしまったんです。すると終了後、彼が「第1番をやり直さないとイケないな」と言うんですね。つまり、来年も来ると。それから6年間も宮崎に通い、初代の音楽監督まで務めてもらうわけですが、あのトラブルがなかったら1回で終わつたかもしれませんね。

——2001年のスターン氏の没後は、シャルル・デュトワ氏を音楽監督に迎えます。

青木 スターンは古典を中心に演奏したので、聴衆を広げようとするば次は近現代。するとやっぱりデュトワです。宮崎でストラヴィンスキーのような近代の難解な曲が受けるはずがないと思うかもしれませんが、実は初心者ほど偏見がない。また、こんな曲は宮崎でしか聴けないと都会からもファンが大勢来しました。デュトワという人はこだわりが強く、人によって好き嫌いがはっきり分かれますが、芸術全般の素養



2001年第6回宮崎国際室内音楽祭 巨匠たちによるフィナーレ (左からアイザック・スターン、ジョーゼフ・カリクシュタイン、原田禎夫、川崎雅夫)

が深く、あれほど緻密なプログラムづくりができる指揮者は他にいない。彼は今年で退任ですが、宮崎国際音楽祭の幅を格段に広げたのは彼の功績です。今年で音楽祭は15周年を迎えましたが、対極ともいえるスターンとデュトワによってバラエティに富んだ音楽を楽しむことができました。来年以降は、新しい世代の音楽家を中心にして、新しい音楽祭をつくり上げ、今まで以上に盛り上げていきたいと思っています。

——ピアニストとしての今後の抱負をお聞かせください。

河村 モーツァルトの全協奏曲とバッハに取り組んでいきたいと思えます。また、5歳からドイツにいますが、やはり私は日本人。日本でもできる限り若い人の育成などに携わりたいですね。日本の若い子たちと一緒に演奏したこともありましたが、ピアニストを目指す子たちは、本当にピアノだけになってしまいがちです。けれど文学や美術など、その国の文化を広く学ばなくては、音楽を本質的に理解できないし、良い演奏もできません。ピアノ以外のことに、もっと目を向けてほしい。そこから得られるヒントは本当たくさんありますから。



2008年デュトワ氏を空港ロビーで出迎える青木氏

### プロフィール◎青木賢児氏 (あおき・けんじ)

1932年、宮崎市生まれ。1957年NHK入社。「明治百年」「未来への遺産」「NHK特集」などの大型特集番組のプロデューサー、報道局長、放送総局長などを歴任。91年から96年までNHK交響楽団理事長。93年から宮崎県立芸術劇場館長を兼任し、バイオリニストの巨匠アイザック・スターン氏を招聘して「宮崎国際室内音楽祭」を創設した。01年のスターン氏の没後、NYで行われた追悼演奏会で、「スターン氏の晩年の情熱は宮崎に注がれていた」との弔辞が読まれる。04年からは世界的指揮者シャルル・デュトワ氏を芸術監督に招聘し、さらなる発展へとつなげた。